届け 世界の果てまでも

令和４年１０月２６日　　Ｎｏ．４２　　文責　校長　飯久保一男

もう大人 ⇄ まだ子ども

前号・前々号と大人と子どもの考え方などについて書かせてもらいましたが，大人と子どもの境目はいつなのでしょうか。小学校の６年間は，幼児の特性がまだ残る子もいる１年生から，小学校４・５年生くらいから始まる「思春期※」まで，人生の中で心身ともに大きな成長をする期間です。

大人の世界では５・６歳の年齢差で一緒に働くことは普通のことです。それ以上の年齢差の夫婦もいます。しかし，小学校１年生と６年生の間には，体格をはじめ，精神面や知識面，理解力など，大きな差があります。同じほめ方をしたとき，喜ぶ１年生がいますが，うれしくない６年生もいることは前々号で書きました。

※思春期　…１１歳前後から始まり，１８歳ごろまで続くといわれます。大人ではないけれど，全く子どもでもない「思春期初期」から始まり，大人と子どもが入り交じりせめぎあう「思春期中期」を経て，心も体も大人であることを確かなものとしていく「思春期後期」の３つの段階に分けられます。体の成長に心の成長が追いつかず，誰もが不安定になりやすい時期です。「自分は何なのか」「自分はどう生きたらいいのか」など，自分に直面し，自分を見る「もう１人の自分」が意識されるようになり，心が大きく揺れ動くことが多くなります。

小学校後半の思春期初期の子どもは，大人であることを主張し，大人として扱うことを望みます。しかし，都合が悪いときは，まだ子どもであることをアピールすることもあります。何とも厄介な時期です。

思春期になると自我が芽生え，身近な大人（＝親や教師）の価値観との違いを意識し始めます。それでも，心が成長しきれていませんので，不安や悩み，不満をもつ時期です。矛盾した自己主張もあり，「反抗期」ともいわれます。それまでは，親の言うことをよく聞いていたのですが，友だちや教師などと関わる中で，親とは違う価値観をもち始め，親の価値観とぶつかり，ときには反抗的な態度をとるのです。親とは違う「自分らしさ」を求めるようになり，自分だけの部屋を欲しがったり，自分のプライバシーな部分に触れられることを嫌ったりします。口が重くなり，それまではよく話してくれたことを話さなくなる子も多くなります。親の価値観に対して批判的で否定的になり，親と無理にでも離れようとして親に反抗することもあります。

実は，この年代の子どもが，親のことを鬱陶（うっとう）しく感じるというのは，子育てとしては成功しているのです。それが普通なのです。逆に，いつまでも親の言うことを素直に聞き，親の言うとおりに育っている子どもは，どこかで無理をしている可能性がありますので注意が必要です。

思春期は，親からすると「子離れ」の時期，子どもからすると「親離れ」の時期です。親の対応や子どもの特徴をまとめてみます。

＜親から精神的な自立をしていきます＞

思春期の子どもには，親は干渉し過ぎないようにすることが肝心だといわれます。大切なことは「信じて待つ」ことです。口や手を出したい気持ちをぐっとこらえて見守ることが大切です。

特に友だちの目を気にします。親に何かやってもらっている姿，サポートしてもらっている姿を見られることを恥ずかしいと感じる時期です。「まだ親にやってもらっているの？」「子どもっぽいなぁ」と言われたくないのです。男の子の中には，母親と買い物に行っている姿を友だちに見られるということは恥ずかしいという子が多くいます。まだ親を頼りにしていると見られるのが嫌なのです。

また，男の子は父親を，女の子は母親を意識します。男の子が父親と対等であると思って勝負を挑んだり，女の子が母親を超えたような気がして生意気な口を利いたりするなどの姿を見せることがあります。子どもに負けない親も「高い壁」として，ときには必要な場合があるかもしれませんが，徐々に子どもに勝ちを譲るほうが「親を超えた」という実感から子どもの気持ちが安定していきます。

＜仲間との関わりが「深く」「せまく」なります＞

思春期の子どもは，どういう友だちが自分に合うのかを見つけ出し，価値観の似た仲間と「深く」「せまく」付き合うようになります。同性の仲間の場合が多く，モヤモヤした気持ちや体の変化から生まれる不安や悩みを共有できると，「自分だけじゃないんだ」「みんな同じなんだ」などと確認でき，安心できる仲間になります。

以前にも書きましたが，お互いを高め合えるプラスの影響を与え合う仲間をつくってくれると安心ですが，マイナスの影響を与え合うような，親から見て心配になるグループをつくることもあります。そういうグループからなかなか抜けられないことも思春期の特徴です。プラスに影響し合うグループに入っている子たちは，自立へスムーズに向かっていきますが，マイナスに影響し合うグループであっても，認めてくれる仲間がいる場合，不安を共有し，価値観を受け入れてもらえることで生き生きとすることもあります。

気になるのは，仲間に入ることができない子どもです。自立できる強い意志がある場合はいいのですが，なかなか自立できず，大人になっても，この時期の過ごし方が影響してしまう場合があります。

＜そして，自立へ＞

「自分はいったいどういう存在なのか」ということを考え，自分の本質を自覚し，他者との違いを認め，自立に向かっていきます。仲間の中で，自分は「こういう人間なのだ」と知ることができると，とても安心できます。その意味においても，仲間は，客観的に自分を見てくれる，いわば「自分を認識するための鏡」の役割を果たす，必要で不可欠な存在なのです。このことは，どんなすばらしい親であってもできません。逆に，親が仲間の代わりをしようとして自立への影響が出てしまうケースもあるのです。思春期の子どもたちは，自分を肯定的に評価してくれる仲間の中で，もがきながらも，ゆっくり「自分らしさ」を求めていきます。

それを支えてくれるのが家族や親です。安心できる家族がいること，いつでも帰れる場所があることで，自分らしさを確立し，世界へ羽ばたいていけます。

親は，子どもたちにとってのいちばん身近で最大のサポーターです。子どもの成長とともに，親も成長し，徐々に「子どもを信じて待つ」姿勢を身につけることが大切です。

長男は結婚し，経済的にも自立しています。家の新築にあたって，多少とはいえない額ですが…多少の補助をしました。
次男は就職４年目，富士河口湖町に住んでいます。ときどき洗濯物を持って帰ってきます。
先日，スマホを買い換えたとき，次男の通信料をまだ私が払っていることが判明しました。
また，車を乗り換えたいと親に借金をし，次男の好みの車を購入して，乗り回しています。
退職後はお前らに面倒見てもらうぞと言ってみましたが，むむっ，期待していた返事が…。